

〔翻訳〕

メランヒトン『道徳哲学概要』（その3）
EPITOME PHILOSOPHIAE MORALIS REPETITA ANNO 1548
第1巻
LIBER PRIMUS

菱 刈 晃 夫

情念について
De AFFECTIBUS.

情念に関する教えは有益である。第一に、徳と情念との区別が認識されるために。次に、善い情念と悪い情念の源泉が考察されるために。第三に、ストア派の誤りが論駁されるために。彼らはしばしば教会で多大な混乱を引き起こしている。なぜなら以前より多くの狂乱した人々、そして再洗礼派はこのところ何年かすべての情念が鼓舞されることを望んでいて、ほとんどストア派のようである。しかしまず活動の場が考察されなければならない。すなわち人間の魂であり、さらにその能力が区分されて、この器官とその活動に特有の個々の能力が何であるかが見られねばならない。この〔情念と魂に関する〕教えはすべての生において必要であり、すべての人々がこれを知らなければならない。次いで私たちが、情念は欲求〔傾向〕であることを学んだ後、欲求の段階が区別されなければならない。

ところで三つに区分するのが慣例になっている。自然の欲求、感覚の欲求、理性の欲求である。自然の欲求〔自然的欲求〕を人は食物や飲み物の欲求と名づけていて、これらは血管による吸い上げである。そしてそこから胃の開口部で痛みが生じ、それによって空腹が知られるようになる。次に感覚の欲求〔感覚的欲求〕は二つある。触ること〔触覚〕に固有のもので、神経において全身に散らばっているが、すなわち快楽と苦痛である。他のものは動き〔運動〕であるが、認識に続いて、心〔心臓〕に固有のものであり、ちょうど喜び、悲しみ、怒り、愛、憎しみなど、恐れること、望むこと。最終の段階は、意志の欲求〔意志的欲求〕である。というのも意志において、ちょうど心にあるように、追跡があり、もしくは逃避があって、心と意志とのあいだにはある結び付きがあるから。しかし善き情念もしくは邪悪な情念について私たちが語るとき、私たちは空腹や喉の渇きに

ついて話しているのではないし、これら筋肉に固有のものについてでもない。なぜならこれらは自然に固有のものであって、このように自然の中に作られてあって、意図や、もしくは意志によって導かれるものではないから。ちょうど筋肉が切れて痛みが必然的にあるように、この苦痛は意図や意志によって除かれるものではないように。

しかし他のある種のものに関する議論があつて、それはすなわち情念についてであり、心と意志に固有のものであり、それにはちょうど恐れ、希望、愛、憎しみ、喜び、悲しみ、憐れみ、怒りなどがある。これらの定義は次のように保持されなければならない。情念とは、心〔心臓〕もしくは意志における動きであり、認識に続き、それによって私たちは提示された事物に付き従うか、もしくは避け逃れる。そして心の中で喜び、もしくは悲しみはおのおの他の情念を極致まで伴う。したがってすべての情念の中で特別で最高のものは喜びであり、これは心〔心臓〕の中にあつて生を促進し、悲しみは、生を破壊する。これはそのように神的に作られている。なぜなら心臓には絨毛があつて、これは悲しみにあつて強く引き締められ、自然の体液を干からびさせてしまい、精気を消滅させてしまうから。これに対して喜びに際して絨毛は緊張を解かれ、精気はより豊富により輝くように生じる。ところで生にもっとも近い栄養とは精気であり、これは燃える蒸気 (flammeus halitus) であり、これを血液から心臓は神秘的な力によって生み出すのでだが、このよう神によって人間には心臓〔心〕が植え付けられているのである。

ところで心臓にはさまざまな運動があるが、弛緩と制限であり、動脈の脈拍に作用する。それに続く病気であるが、それは動悸と呼ばれている。第三の種類は、その前のものから区別されるが、情念である。そしてガレノスは正しく述べているが、情念も心臓の自然な運動であるが、それが適度なものである限りは、そうである。情念の定義を紹介した後、その活動の場〔中心〕が明らかにされ、さらに短くストア派のたわごとを論駁しよう。これは三重に間違っている。第一に、彼らはすべての情念が見解〔臆見〕(opinionones) であると言う。第二に、彼らはすべての情念が邪悪であると言う。第三に、彼らはこれが自然本性から取り除かれるべきであり、除去されうると言う。

情念は見解であるか

AN AFFECTUS, SINT OPINIONES.

簡単かつ明白な証明として、情念は見解ではない。

実体が異なるものは何であれ、それは現実に異なっているのであり、つまり、異なった事物である。

見解と情念とは実体において異なっている。

ゆえに異なる事物である。

小前提が一番よく知られている。というのも見解は認識する部分にあって、それは脳に属している。しかし情念は心臓〔心〕にあることは明らかである。しかし認識は、あるいは見解が先行していて、そのあるものは正しく、あるものは間違いである。ちょうどソロンが息子の死に関する誤った話を聞いて、痛みによって苦しめられ、その反対に誤りであることを知って、痛みが止んだように。なぜなら心の本性はそうにあるのであって、認識によって事物が提示されると動かされるのであって、それはたとえ真であろうとも、偽であろうとも、そうなのである。そこから次のように言われる。知らざれば欲心なし(Ignoti nulla cupido)。しかしそれにもかかわらず一方では事物の認識があり、他方では情念がある。このように一方では事物を見るということがあり、他方では心における愛の情火がある。

第二の問い

DE SECUNDA QUAESTIONE.

すべての情念が独自に、もしくは自ら邪悪であるということはない。そうではなくあるものは善であり、これは自然本性において元の状態のまま〔墮落することなく〕あったのであり、祝福されてあることであろう。そして天使の中ではそうあって、次のような証言が示す通りである。まずとくに人間について私たちは話そう。神の法は人間に数々の情念を規定していて、確かに神は情念という道具〔手段〕(instrumenta)を人間の中に植え付けた。したがって、ある善き情念が独自にあることは極めて確かなことである。そしてこのような定義が保持されていく。善き情念は独自に存在していて、これは神の法と一致し、理性による正しい判断とも調和する。ちょうど妻や子を愛したり、野蛮な悪行に怒ったり、友人の安全を喜んだり、罪のない人、とりわけ友人の災難に際して憐れみが引き起こされたり、というように。

これに対して悪しき情念も独自のものとして存在し、これは神の法によって禁じられているし、あるいは正しい理性の判断によって有罪とされている。ちょうどカインもしくはサウルにおける嫉妬や、それに似たようなもので、罪なき者が災難にあって喜ぶような、他人の不幸を喜ぶような気持ち(ἐπιχαιρεκακία)〔シャーデンフロイデ〕のようなものである。

二つ目の議論

Secundum argumentum.

神によって作られたものは、善である。

情念(*στοργή*)は、自然本性の中に作られて〔植え付けられて〕いる。

したがって善である。

というのも親の中に子に対する燃えるような愛があることは明白である。これは確かに人間の中にある神の像と関係しているのを私たちは知っている。それゆえにそうした情念は人間の自然本性に植え込まれている。それによって子に対する、そして私たちに対する神の愛を思い出させるために。ちょうど真の愛によって、私たちの空想によってではなく、私たちが子どもを愛するように、そのように真の愛によって永遠の父は子を愛し、その災難の中で憐れまれた。

たとえもしストア派がこれを馬鹿げていると言い、どれほどこうした〔情念の〕運動が神の本質(*essentia*)の中でもっとも優しいものであるか、私たちが十分に見通していないにしても、それにもかかわらずそれは真であり、もっとも確かなことである。なぜなら永遠の父ははっきりと次のように述べているから。これは私の愛する子、私の心に適う者〔マタ 3, 17〕。つまり、子を注視するとき、真の極めて激しい喜びに突き動かされるということである。同じく、私は主、あなたの神、妬む神である〔出 20, 5〕。つまり、罪人のことを真に怒っているということである。すでに話したように、独自の善い情念があるということが極めて確かであるにしても、それにもかかわらず人間の自然本性が墮落した後には、すでに心には多くのさまよう動きがあって、理性から逸脱している。そこから情念の強烈な混乱が生じ、多くの元より邪悪な情念と善き情念が混ぜ合わさってしまうのである。同じくして善き情念は偶然にも邪悪なものとなってしまう。なぜなら秩序によって支配されていないからである。その結果、多くの人々は神よりも、自分の人生、自分の快樂をより多く愛するようになってしまう。

人間の自然本性の弱さを私たちが認識するために、こうしたさまざまな混乱が考察され嘆かれねばならない。そして神からの助けと導きを冀おう。それは福音の中に約束されている。まして天の父は、求める者に聖霊を与えてくださる〔ルカ 11, 13〕。同じく、霊もまた同じよう、弱い私たちを助けてくださいます〔ロマ 8, 26〕。私はダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ〔ゼカ 12, 10〕。続いてもう一度神の語りがたい善意を考慮しよう。これは神自身から私たちに分け与えられていて、息子のために、私たちの胸の中に聖霊を解き放つ。すべての情念を非難するように見える言説を説明することは、もはや容易である。ちょうど、肉の思いは神に敵対し〔ロマ 8, 7〕。つまり、情念は自ら、あ

るいは偶然に人間の中で邪悪なものとしてあり、これは神の言葉の光、神の前での恐れ、信仰や神への愛によって支配されていないのである。

三つ目の問い

すべての情念は自然本性から除去されるべきか

DE TERTIA QUAESTIONE :

An omnes affectus

ex natura tollendi sint ?

この問いに関しては、先行する答えから容易に判断される。というのも神から、私たちの中に神の法と一致し調和する情念があるように、さらにそのあるものはそのようなものとして神的な自然本性の中に植え付けられてあるよう、先に命じられていると言われているからである。ストルゲイ(στοργαί)として、そうした情念が人間の自然本性から除去されてはならないし、できないことは明白である。そういうわけで、ストア派のアパテイアが、ねつ造されたものであり、誤りであり却下されねばならないことは明白である。このことは神の法や、人間の自然本性そのものの働きから論拠を得てくることで、詳細に説明される。そして法とは、じつは確かに人間の自然本性の〔中に組み入れられたもの〕、人間の中にある神の像の活動の記述である。もし墮落していなかったら、人間の自然本性はそのようなものであったであろう。この中でこうした情念の正しい炎があったことであろう。心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい〔マタ 22, 37〕。同じく、隣人を自分のように愛しなさい〔マタ 22, 39〕。そして処女から生まれた神の子において自然本性はそのようなものであった。またこの死すべき生においても、天における生の私たちのあいだでも自然本性はそのようなものであり、今や再生した者の始まりにはそうした情念が、火花(scintillae)のようにある。次いで自然学からも、動物において、空腹、渇きといった欲求がなければならないことは明白であり、こうした欲求に向けて〔人体の〕器官は作られている。そのうえ、人間においては悲しみ〔悲嘆〕は自然本性を破壊し、その反対に生を保持するにはある種の喜びがある〔喜びは生の保持に繋がる〕。したがって人間から情念は決して除去されないし、されてはならない。次いでそうしたすべてのことはストア派のたわごとであり、情念を除去することに関しては、もっとも空しい空想であり、うそであるということであり、神の法と自然とに相反することになる。しかし私たちは善き情念が、心もしくは意志の運動であり、神の法、あるいは正しい理性と一致し調和していることを知ろう。そしてこの情念は温められ、正しく導かれるべきで、その秩序の限界の内部で抑制されなけれ

ばならない。ちょうどアブラハムが息子のイサクよりも神をより多く愛したように。それに対して悪しき情念とは、神の法、もしくは正しい理性と敵対するものである。そしてこれらは抑制され、しつけられなければならない。パウロがこう言うように。霊によって体の行いを殺すなら、あなたがたは生きます〔ロマ 8, 13〕。ところで極めて賢明かつ明白に善い情念と悪い情念は、神の法から区別を取り入れることで判別される。ところでどこから人間の中にこうした墮落がやって来たのか、そしてこの死すべき自然本性の中で善い情念と悪い情念が存在するようになったのか、それは教会の教えの中に伝えられているが、それについてはより長い説明が必要とされる。

アリストテレスは何を考えていたのか

QUID SENSIT ARISTOTELES ?

善とは教会の教えによれば、神によって作られて秩序づけられたものであり、ある目的に向けられている。これは、種もしくは個の保持を目標としている。したがって創世記1章ではこう言われている。神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった〔創1, 31〕。つまり、神自身によって秩序づけられていて、神の気に入る、善き目的のために定められている、ということである。しかし天の教えなしの哲学は、次のように見なして誤ってしまう。つまり今や人間の自然本性の中に、誤った欲求や死があって、そのように作られ秩序づけられているように判断してしまうことである。それゆえにアリストテレスは、人間の中に異なった情念が、あるものは理性と調和し、あるものはこれに抗う、とはいえそれにもかかわらずすべての始まりには、自然の運動と、異なることのない動きがあると判断するのである。

しかし教会の教えは区別を明らかにしていて、それは人間の自然本性に作られて秩序づけられている情念が何か、そして秩序づけられていない情念は何か、教えてくれる。ところがアリストテレスはここでこうした区別を知ることはなく、欲求の種を考察し、種に関するものは何か、空腹、渇き、痛みといった欲求は、動物の中になければならない、と正しく考える。なぜならこうした運動は必要とされるべき食物や飲み物へと駆り立て、自然本性を破壊するものは避けるように駆り立てるからである。このように欲求の種について語るとき、心の中には喜び、悲しみ、愛、恐れ、希望、怒り、憐れみがなければならぬと彼は考えるのであり、その結果として求められるべき調和へと駆り立て、避けられるべきその反対のものへと駆り立てる。そして、そうした欲求や情念が善き行いの拍車(calcaria bonarum actionum)となるように、そのように自然本性が作られていることは真実である。ちょうど両親が、もし極めて強力な愛の力によって、保護されるべき

子の世話に向けて駆り立てられることがなかったら、決してそうした骨折り〔苦痛〕を教育において(in educatione)なしとげる〔甘受する〕ことはないように。

しかしそれから墮落が続いて生じ、その原因についてアリストテレスは知らないまま〔欲求や情念の〕種を保持し、人間の自然本性の中に情念はなければならないと教えている。これはたとえ逸脱しているにしても、それにもかかわらず理性によって確かな限界へと元の位置に引き戻されなければならない。なぜなら理性は、どのような対象の中に欲求や情念がしっかりと留まらなければならないかを示しているからである。ちょうど空腹について彼は、どのようなものが自然本性にふさわしく、適度を確立するかを示している。そのようにして愛について、怒りについて、憐れみについて彼は考える。たとえしばしばこれらが逸脱するにしても、それにもかかわらず理性は限界を指示し、その限界の内に抑制されるときには、情念は善いものであり、これを確かに彼は賢明にも中庸と名づけていて、このように言っている。怒りは指揮官としてではなく、兵士として有用である^{*1}。というのも彼は動物において必然的に、そうした動きや欲求や情念がなければならないと考えているからであり、そうした種については真実であるから。しかし理性的な自然本性においては理性によって制御されなければならない。したがって政治的な法は段階を作り出し、情念が抑制され、外的な四肢に命令しないようにし、法に反して行動しないようにするが、理性によって手綱を引かれている。ちょうど怒るアキレウスをパラスが引き止め、剣をさやから抜くことがないようにしたように。

さらに教会の教えにおいては良心に反する情念と行為との違いが伝えられている。ここで意志は情念を抑制せず、知ることや志すことがこれらを許してしまう。この区別の認識は非常に必要である。なぜならこれらの段階には無限の隔たりがあるからであり、愛もしくは怒りによって点火させられて、良心に反することにふけるようになるからである。ちょうど最初の説教の中に神のおきてがあるように、罪はあなたを求めるが、あなたはそれを治めなければならない〔創 4, 7〕。

どの〔魂の〕能力が導かれるのか

QUAE POTENTIAE REGI POSSUNT ?

すべての生において多くの事柄を判定し、性向を支配するのに、魂とその能力の段階について伝えられている教えを、どれほど小さなものでも、保持することは必要である。そして残りの部分の内に、どのような能力が自然に活動し、どの

*1 セネカ『怒りについて 他二編』兼利琢也訳、岩波文庫、2008年、104頁、参照。

ような能力が自由に活動し、どのような能力が抑制され、どのような能力が導かれるのか、考察されなければならない。したがってまず、理性的な最高の能力において意志は、自由を有するように、つまり、認識された事物を選択する、あるいは選択する、あるいは行いを止める能力を持つように作られているということが、知られねばならない。しかしこの可能性は元の自然本性において多かれ少なかれ制約されている。今や大きく弱っていて、さまざまに制約されているが、しかしそれにもかかわらずあるものは「根本的に」残っていて、人間の意志の自由に関する議論の中で言及されなければならないことになる。さらに意志の中には駆動力に命令すべき可能性が残されていて、外的な四肢の動きに関して、その結果、手に対して他者のものを奪うように、飲み物を口にもっていかないように、と命令することができる。

次に、導かれることのできる能力には二つあるが、それは心の欲求(*appetitiva*)と駆動力「衝動」(*locomotiva*)である。ところでこれらの能力は異なる仕方で導かれるが、さらに神は二種類の支配を人間の自然本性そのものに驚くべきことに植え付けることで、この神の像そのものが想起され、私たちが規律と、心の正しさとの区別を考えるように、目論まれている。駆動力は、奴隷や、愚鈍な者のように、たとえ善いもしくは悪い理由が示されていなくても従う。ちょうど意志が目にとらえるようにと命令するとき、理由が示されても、あるいは示されていなくても、駆動力は従う。しかし心は確信「説得」なしには従わない。つまり、何らかの善いことが示されることなくして、奴隷や、もしくは愚鈍な者のようには従わないのであり、説得によって、知恵ある者や自由な市民のように、動くのである。ちょうどウァッローのところに隠されて、アントニウスから自身が容赦されるのを聞くまで、恐れを捨てることはなかったように。こうした服従は他の奴隷的な者のものよりも優れているし、真の正しさの像であり、偽善者のものではない。

ところでこうした区別は考察されなければならない。どの能力が、どのようにして導かれるのかを私たちが知り、私たちが自身をそうした能力を導いていくことへの配慮に駆り立てるために。パウロが言うように、自分の五体を義のための道具として神に捧げなさい〔ロマ 6, 13〕。生なる「植物的で活力的な」ものと感覚(*vegetativa et sensus*)は自然に活動するのであり、自ら意志に従うことはなく、衝動によって支配されている。盗癖のある人間は、たとえ心の情欲を消し去ることができなくても、それにもかかわらず駆動力を通じて手を引き止めることができるし、しなければならない。神はこうした自由が人間の中に残り、規律が保持されるのを望んでいる。そして駆動力の力、もしくは筋肉の力そのものが、こうした自由の段階が人間の意志の中に残っていることの明らかな証となる。こうした諸力の支配は明白で分かりやすく、アリストテレスの分析に光をもたらしてい

るが、それはニコマコス倫理学第一巻の終わりで語られている^{*2}。

徳の定義について

DE DEFINITIONE VIRTUTIS.

哲学者たちのあいだ〔著作〕では徳に対して輝かしい名が与えられ、そこでは正しく行われるべきことへの熱烈で急激な衝動が意味されているが、これはそれでも知恵によって導かれる。そしてこの優秀さは極めてまれであるので、したがって預言者や使徒の話の中では徳の名にはほとんど言及されず、善行について述べるのが通常であり、こうした呼称はより明白である。というのも正しい判断と一致し調和する意志の行為を意味しているからである。これは、たとえ意志や心の中に熱烈な衝動がなくても、理解され作用することが可能である。ちょうど、アレクサンドロスがダリウスの娘をじっと見ることなく、たとえ心には情欲の炎がないというわけではないにせよ、自らを抑制することができたように。

こうした名称について思い起こすことは、使徒たちが語るほうが、哲学者たちが語るよりも、人間の弱さゆえに違うように語るのだと言うことを考えるのに、有益である。しかし私たちは哲学のことに携わろう。そこでまずほとんど曖昧ではない〔かなり明瞭な〕定義が学ばれねばならない。それは自然本性そのものから得られるもので、若い人々でさえ理解できるものである。徳とは意志とその他の力の服従であり、正しい理性と一致し調和する。人間の自然本性は、その中で知恵が輝き、神的な精神の中で規範と一致するように作られていて、それから人は、この神的な規範に従うとき、正しく生きることになる。それゆえに神は自らの精神にあるこれらの光線を私たちの内に注ぎ込んだ。というのも被造物の中に、神は存在し、それはどのようなものかという証があることを欲したからである。こうして私たちに神の判断について明示し、想起させているのである。次いで、私たちの行いを導こうとしてさえいる。

しかしアリストテレスの定義においては、あの服従の様式が加えられている。それには原因が記され、それが服従を導く。徳とは選択の習慣であり、賢い者が区別するように、正しい理性に従い、中庸の中に存する^{*3}。

習慣(habitus)という名称は弁証法〔論理学〕もしくは芸術の事例から周知のものであろう。芸術家である画家は、習慣づけされていない〔訓練されていない〕者よりも、より正しく確かに絵を描く。しかし私たちは、それでもでたらめに駆り立てられてはならない、熱烈で急激な衝動を理解すべきである。それゆえに選

*2 アリストテレス『ニコマコス倫理学(上)』高田三郎訳、2009年、65頁以下、参照。

*3 同前書、90-91頁。

択的習慣(habitus electivus)、もしくは προαιρετικόν と名づけるとき、服従を導く原因が付加される。ところで προαίρεσις(プロアイレシス)、もしくは選択(electio)は二つのものを含むが、それは精神における判断と、自由な賛同、もしくは意志における選択である。無知による過失においては精神による尽力(mentis officium)はない^{*4}。それゆえに「こういう場合」自由選択によって行われた行為とは言われない。真の強制においては意志が欠けている。それゆえに強制されて行う者は、自由選択によって行うとは言われないのである。したがって善い行いの中には、正しい判断、正しい判断に自由に従う意志が、群がり集まるのでなければならない。ところで外見は徳の行いのように見える多くの行いがあるが、しかし第二の原因が欠けているか、あるいは何か一部分が活動していないため、たとえ外見では似たようなものであるにしても、すべての行いが徳の行いとは言われることはない。

さてアリストテレスは四つの段階を描いている。すなわち、一つは自然本性から、もしくは φύσει その源泉からのもの。ちょうど、カトーは強者と言われるが、なぜなら自然本性が強健であるからである。

一つは δόξα 思いなし〔思考〕であり、つまり、見解〔予想・想像〕(opinion)である。ちょうど、ブルトウスはたくましいと見られるが、それは魂が説得によって捉えられているからである。

一つは βουλήσει 意志によるものであり、ちょうど、全くの見せかけであっても、タラソは外見的にたくましく見えるように。

最後の段階は、これが本来の徳であるが、そこでは判断や意志が自由にさまようことはないし、適所で一致・調和を選択する。

中庸について DE MEDIETATE.

人間の行為における正しさは、自然法と意志の一致にあることは、自然によって知られている。自然法とは神の光であり、人間の精神に植え付けられていて、神的精神にある永遠の規範と調和する秩序を明らかにしている。したがってこのような徳の定義は十分かつ明確なものである。徳とは、正しい判断と一致し調和する意志の服従である。アリストテレスの言葉の意味も全く同じである。しかしその服従をアリストテレスは、中間にあると言って表している。つまり、情念とすべての運動を中庸へと連れ戻す〔至らせる〕ことである^{*5}。

*4 同上書、105-106 頁。

*5 『アリストテレス全集 14』岩波書店、1968 年、221-223 頁、参照。

こうした認識は極めて正しいものであり、自然学からもそう主張される。そこで自然では、すべての欲求と運動において中庸を愛することが見分けられる。ちょうど自然は、並外れて多い食物、そしてあまりにも少ない食物によって害されてしまい、適度な食物によって維持され、並外れて多い運動、そしてあまりにも少ない運動によって害されてしまい、適度な運動によって維持されるように^{*6}。このように情念において、それは行動の源泉なのだが、極端な〔過度の〕恐れ、極端な勇氣、極端な怒り、極端な寛容などは人間を傷つけてしまう。このようにして芸術家は中庸を求める。ちょうど、音楽が極端に高い声や極端に低い声を避けるように。このように徳は中庸である、と賢明に考えられるわけである。そしてここで数多くの考えがぴったりと合うことになる。何ものも度を過ぎさずに (Ne quid nimis.)。物事においてすべて適度がもっとも美しい徳なのである。

したがって私たちはアリストテレスの教えにおいて、すべての人生の中で中庸が愛され見つめられるべきであることについて、私たちが注意を促されているということを心に留めておこう。なぜなら徳は中間〔中央〕にあることを示しているからである。しかしその後には中間とはどのようなものなのか、という問いがある。というのも円においける中心のように、一つは不変的な中央であるから。一つは可変的なもので、ちょうど、食物がある人には強く〔しっかりしていて〕、ある人には弱く〔物足りない〕思われるように。というわけでここそこでアリストテレスは中間を区別している。

ところで比例に関する算術と幾何学の教えはよく知られている。そこではこう言われている。一つは算術のアナロジー〔比率〕であり、一つは幾何学のそれである。算術の比率とは、3 もしくはそれ以上の数を配置すると、区別して平等が維持されるというもので、ちょうど 3、5、7、9 というようなものである。ここでの数は個別に 2 ずつ隔たっている。それに対して幾何学の比率は、区別ではなく、均整の平等が維持されるというもので、ちょうど 9 と 3 の関係が、12 と 4 の関係と同じようにあるというものである。なぜならこの二つには三倍の比率であるから。

こうした子ども向けの教えはすべての人々がもっとも知っていなければならないものである。そしてしばしば教養ある人々はこの区別をからかう。ちょうど、ユリウス・カエサルが人物を配慮することなく市民の能力を平等に分割し、平等な数に最下と最上とした場合のように。これは算術的な比率による平等性である。もし元老院議員を最下の市民よりも、より多くしたなら、これは幾何学的な比率ということになるであろう。このことを私は引用するのだが、それはプラトンとイソクラテスが述べていることで、国家においては幾何学的な公平性が維持され

*6 前掲『ニコマコス倫理学(上)』、74 頁以下、参照。

るべきである。

このようにしてパウロのコリントの信徒への手紙二 8 章 13 節以下では幾何学的な公平性が整えられたアナロジーと理解されていて、このように述べている。公平にするために。すなわち算術的なものではなく、幾何学的な公平であり、それは確かに自発的な伝達によってであり、新しい政治的な法によるものではない。つまり、指導者は何か市民たちよりも、より維持されるべきであるということである。

そしてほとんどの徳においてはそうした不変の中央が求められるのてばなく、他の幅の広い、すなわち幾何学的な中央が求められていて、これはさまざまな事情によっていろいろであるということになるので、そういうわけであるものはある人にとってふさわしいということになる。アリストテレスはテキストの中で述べている。中央〔中庸〕は私たちとの関係から得られる、つまり、状況から私たちにふさわしいかを私たちは判断する、と。強い人と弱い人における中庸 (temperantia) は同じ中央〔中間〕 (medietas) ではない。

ストア派のやり方に従ってある一つの段階〔度合〕が求められることないように、こうした相違を考慮することは人間の生の数々の活動において必要である。ヨセフ、洗礼者、ペトロは純潔であるが、それにもかかわらず純潔の度合は人それぞれである。しかし今まですべて原理的な規範と一致している。すなわち、抑制は良心に反する欲望によって解放されることはなく、この規範の内に留まる限りは、たとえ度合は異なっている、彼らは純潔である。こうした法律家は、ἐν πλάτει 幅をもって公平性を求めると言う。

こうした子どものための忠告〔初等教育的な教え〕は、迷信や、極端な解放によって、判断が損なわれてしまわないようにするために必要である。したがって若い人々はこの場所で中央〔中間・中庸〕について私たちに向けて述べられたことを覚えておくようにしよう。そして確かに賢者が判断するように、こう付加される。つまり、賢明で経験ある人間が状況にふさわしいと判断するような形で、この中庸は保持されるべきである。なぜなら規範がだれかの空想であると望むのではなく、芸術家の判断であることを望むからである。つまり、それについて判断する、そうした物事〔事物〕 res の源泉を認識するということであり、次のフォキュリデスの言葉の通りである。あなたは知識をもたない人々の判断に何事も任せてはならない。同様に、プラトンも言う。正しく判断されるためには知識によって判断されるべきであって、数によるべきではない^{*7}。同じく、人は芸術を学習するというよりも、練習する。同じく、建築家は、大工の仕事から成し遂げられるのではない。同じく、騎手は馬に乗ることを学ぶ。無知な者は、何も学ば

*7 『プラトン全集 7』岩波書店、1975 年、123 頁、参照。

ない。これらはすべて芸術家のように判断しなさい、と忠告しているのである。

プラトンの立場 LOCUS PLATONIS.

プラトンの『法律』第6巻の優れた言説を付け加えよう。そこで二つの公平性について言及されているが、幾何学的な公平が見事に讃えられている。なぜなら多くの徳の中でも優位を占めていて、支配における善い政体、すなわち貴族政の像であるからである。これがその言葉である。「たしかに「平等は友情を生む」という古い諺は真実であって、まったく正しく、適切に語られています。しかし、この友情を可能にする平等とはどういう平等なのかということがすこぶる不明であるために、それがわたしたちをすこぶる混乱させるのです」^{*8}。

というのも公平性には二つあって、たとえ名称は同じでも、それにもかかわらず多くの事柄において対立しているからである。一つは確かにすべての者が理解しているのだが、量の公平であり、重さや数によってどこでも分配するものである。しかしだれにとってももっとも正しく最善の公平性を把握するのは容易ではない。というのもそれは神の判断であり、人間にはわずかしき与えられていないから。しかし与えられている限りにおいて、国家や個人にあらゆる善がもたらされる。確かに秀でた者にはより多く、劣った者にはより少なく、だれにも自分の自然本性に応じたものを与えるのだが、徳に勝る者は、より大きな名誉を与える。反対により劣った者に応じてより少なく、個人には釣合に応じて与える。そしてこれは市民的な正しさであり、私たちは市民的な秩序の中でこれを求め、かつこれに配慮しなければならない。〔求められ配慮されるべきは〕少数の支配者、あるいは一人、あるいは群衆の政治力ではない。こうした正しさが国家には役立てられねばならない。これは個人に、もし動乱によって悩まされるのを欲しないなら、それぞれにふさわしい同等な〔公平な〕ものを与えてくれる^{*9}。

徳の区分もしくは配分 DIVISIO DISTRIBUTIO VIRTUTUM.

全人生の中でこうした助言はいつも視野に置いておこう。徳に関する教えは必ず認識されなければならない、それは人間の生が導かれるようになるためだけでな

*8 『プラトン全集 13』岩波書店、1976年、345頁。

*9 同前書、345-346頁、参照。

く、神がどのようなものか、明らかにされるようになるためである。神がどのようなものかは、すべての祈りにおいて心に留められねばならない。というのも私たちは神を腕で包む〔理解する〕のではなく、その実態は不可視のものであるので、精神によってこれを見つめ、次のような本性について私たちが語っているのだということを考える。つまり、どこで神は自らを現し、どのように自らを明らかにし、そして他のすべての本性からどういった特質によって区別されることを望んでいるのか〔こうした神の本性について私たちは語り考えている〕。それゆえに徳に関する教えや、十戒から、そうしたものを列挙して集めることは、極めて正しい。この中に神はその意志を表し、もっとも知恵ある秩序によって徳を区分している。それは私たちがどのようにあってほしいかを教えるためだけではなく、自身がどのようにあって、人間がその像に向けて作られていることを、私たちに思い起こさせるためである。したがって十戒から徳の区分が極めて正しく得られるのであり、その最初の板では、直接的に神に関する徳を語っている。二番目の板では、直接的に人間に関することを語っているが、それでもこれそのものは次の目的に向けられねばならない。つまり神にとって人間の服従〔従順〕が明らかにされるということである。

列挙

Enumeratio.

しかし哲学者たちは第一の板の徳に関して非常に少ししか述べていない。なぜなら、たとえ私たちと共に何か法〔律法〕の知識が生じているとはいえ、そして理性は自然の中に神に関する数多くの証を見るときとはいえ、それにもかかわらず大きな混乱や神に関する臆見があり、神意について忌むべき疑念があり、どこであれ精神は福音の光によって導かれてはいないからである。そして哲学はただ法〔律法〕の教えであるので、福音の約束については無知であり、信仰に関しては何も言うことはできない。この信仰によって人間は子〔イエス〕ゆえに神によって受け入れられるのである。また神の援助への希望や、祈りについても〔哲学は何も言えない〕。こうした徳の教えはただ福音の声の中でのみ明らかにされている。

哲学の教えと福音の教えとを区別するために、こうしたことを思い出させるのは学習者には必要なことである。たとえ異教徒たちが宗教や神への敬虔について言及するにしても、それは人間の理性によって、福音の光なしに、神に帰するような畏敬のみを理解している。つまり、宗教とは畏敬〔敬意〕(reverentia)であり、それによって理性は神が、永遠の精神が、世界の形成者が、個々の種の愛育者が、善が、正義が、純潔が、悪行の処罰者が、それぞれの種が保持されるように、存在しているのだということを強めるような畏敬である。そしてその結果として服

従があること、さらに外的な儀式による告白が示されるべきである、と判断する。

これは哲学によるもの〔哲学的宗教〕であり、証明によって明らかにされるものであるが、それでもこの理性自身による見解は、狂ったように除去されるか台無しにされてしまう。エピクロス派はそのまま持ち上げ、他の者は神性や目的なしの崇拜をでっちあげ、こうした儀式が神の怒りをなだめると夢想し、かなり大きな人生上の善を獲得すると空想するのである。

これらは誤った見解であり、そこから生じた墮落した儀式〔慣例〕を私たちは放棄し、徳の中に数えないようにしよう。次いで第一の板にある真の徳の名称と定義とを視野に収めておくことはまさに必要であり、これについては福音が告げている。第一の戒めの後に、信仰、これは真の神の知識〔真に神を知ること〕だが、神への恐れ、和解への信頼という信仰、愛、希望、寛容が続く。第二の戒めの後に、祈り、挨拶、告白、恵みの行為が続く。第三の後に、福音への奉仕の、学習の教えの、神的な儀式の保持が続く。しかししばしば云われているように、人間の自然本性には何らかの法の知識が残っていて、再生していない者にも残っている。その限りで、十戒の戒めにとってもっとも学識ある証明があることが知らなければならない。

第一の証明

Prima :

自然の中では結果はそれ自体の原因にかかっている。そして原因の要求に従わないとき、結果はなくなる。ちょうど赤ん坊が母胎の中で、時が来る前に小束を引きちぎれば、亡くなってしまうように〔原因と結果とは結び付いている〕。このように認知的な作用は、それ自体の原因にかかっている、それと一致し調和しなければならない。そうでないものは絆を引きちぎることになる。最初の原因から放棄されてしまったものは、消滅してしまう。

人間は神による結果である。

ゆえに神と一致し調和しなければならない。そうでない場合には絆は碎かれてしまう。

第二の証明

Secunda :

像は原型と一致し調和しなければならない。

人間は神の像となるように作られている。古い詩にも言われているように、それぞれが小さな像の中で神の写し〔例〕なのだ。

ゆえに神と一致し調和しなければならない。

第三のもっとも明確で堅固な証明

Tertia clarissima et firmissima :

人間の自然本性は、とくに神の認識に向けて作られている。神の認識においてそれに従い、自然のすべての法に従うようになるために。なぜならこの神への服従と認識は人間にとって固有の行いであるから。そして私たちはこれが人間の特別の行いであり、必要な業であることを知るようになり、良心による判断という牢獄と明らかな罰が付加されることになるが、それは恐るべき悪行に続くものである。

ゆえに神はこの服従を教えているのであり、従わない者には罰が下るのである。神に従うことは必要なのである。

第二の板の徳

VIRTUTES SECUNDAE TABULAE

第二の板ではまず支配〔管理〕が定められていて、それによって人間は人間によって導かれることになる。この支配の源泉は、両親の指導にある。ゆえにこの板における最初の徳は、支配する者と支配される者における、普遍的な正しさである。しかし普遍的な正しさとは、すべての法に従う〔一致した〕服従である。支配者はこのすべてにおいて下の者たちに義務があるのだが、それは彼らを十戒のすべての法に従って導くことである。反対に舌の者たちはすべての法に従って服従を示さなければならない。

ところでここに明確な証明がある。

人間の自然本性は社会〔共同体〕に向けて作られている。

ゆえに支配の秩序が存在すること、社会を混乱させるすべてのことが回避されることは必要である。ところで命令不服従は混乱を引き起こす。

それゆえに服従は必要である。

さて第四の戒めには、親に対する情愛、そして子に対する情愛があり、これらは二つとも正しさの種類になる。同じくお互いの間での夫婦の正しさがある。これについてはとりわけピュタゴラスの見解が覚えておくに値する。これをアリストテレスは『経済学』の中で引用している。すなわち、夫は妻に対して善行と優しさという義務を負っている。なぜならその婚約者は、嘆願者として、祭壇へ委ね

られるから。本当にこの嘆願者の権利は考慮されねばならない。弱い者は、彼と共に最高法によって進められないように、と願うが、もっとも美しい像はキリストと教会との婚姻である。教会は祭壇へとキリストへと導かれてゆき、自らに保護を受け取り、その前で祭壇へひれ伏し、つまり、永遠の父の前でひれ伏すのである。

個別的な正しさとは、各自に各自のものを配分する徳である。

これは次の三つの戒めを含んでいる。殺してはならない、姦淫してはならない。盗んではならない。そしてこの証明は明確である。

自然の中にあるものは何でも、可能である限り、自然本性の傾向によって自らの種を保持しようと努力する。ちょうど植物や動物の中に種子があるように。

不正な殺害、婚姻の混乱、強奪による不正な蓄えは種を破壊する。

ゆえにこうした悪を避けることは必要である。

さらに第五の戒めには寛容が属しているが、これは徳であって、怒りを抑え、正しさに反することをしないようにする。第六の戒めには貞節が属しているが、これは徳であって、神から禁止されているすべての混合を避けるようにする。この証明はどこかで部分的に知られている。

自然の秩序は神的なものであり、それには従わなければならない。

ところで秩序は神的であり不変である。それは実り豊かなこの中で、男と女の婚姻があって、この共同体が破壊されないようにするためである。

ゆえに子を産むことは必要である。

しかしこの証明によっては、すべての悪行や混乱がこの秩序を妨げていることには十分明確ではないので、さらに神は人間の墮落以前に樂園ではっきりした声で、合法的な婚姻からは外れるすべての混合を禁止しているが、それはこの言葉で定めている。二人は一体となる〔詩 2, 24〕。つまり、一人の男、一人の女、これらの不可分の結合である。

それゆえに、この戒めは樂園において墮落の前でさえ明確にあったということが、入念に注目されなければならない。というのも神は元の状態の自然においてさえ、この秩序によってこれらが従っているのが明らかにされるのを望んでいるからである。

反対に次のこともまたとくに注目されねばならない。それは徳に関する普遍的な教えが人類に伝えられているということであり、それは神がどのようなものか

考察されるためであり、つまり、次のことは正しいのである。人を見ることなく(προσωποληψία)すべての者にとって神は平等である。神はすべての者において罪によって恐ろしいほどに怒り、子〔イエス〕に救いを求める者のすべてを引き受ける。神は真実を伝え純潔である。それはすべての偽りで汚れた自然から区別されるためである。

したがってこうした区別の理解があるようにと、神はこうした徳の知識が人類の中で輝くのを欲している。たとえ私たちは神を、身体の塊のように、腕で捉えることができなくとも、神は精神によって見つめられ、その真の特質によって他の自然本性とは区別される。神は全能で、知恵あり、真実で、善で、正しく、純潔で、最高に自由で、審判者なのである。そして日々祈りにおいてこうした特質は考慮されなければならない。私は全能なる、永遠の、生きる神、私たちの主イエス・キリストの永遠なる父なるあなたに祈ります。計り知れない善意によってあなたは自らを明らかにし、あなたの息子、私たちの主イエス・キリストについて叫びました。これに聞け〔マタ 17, 5〕。天、地、人間、そしてあなたの教会の造り主、保護者、援助者、蘇生者、私たちの主であるあなたの子、イエス・キリスト、そして聖霊と一つの者、賢く、善く、真実で、正しく、純潔で、最高に自由で、憐れみある、私たちを真に愛し聞いてくださる、あなたの教会の見張人よ、あなたの子、私たちの主イエス・キリストのゆえに私たちを憐れんでください。あなたは私たちのために、仲介者そして助力者として、犠牲になるのを望まれました。そしてあなたの聖霊によって私たちを聖別してくださる等。

第八の戒めには真実もしくは正直〔事実との一致〕という徳が属しているが、これはつまり、意志におけるある種の堅固さ、もしくは確かな選択(προαίρεσις)、優れた見解との一致、事実と共にある話や功績、過ち、厚顔無恥、あるいはひとつは感じひとつは示すものを傷つけようとする欲望によってではない、そうした徳である。

なぜこの徳が必要であるかという明らかな証明がある。

第一

Prima :

なぜなら神と理性的な被造物は、事物を理解するようにあるから。

それからところで、事物がそのようにあるように理解がされるとき、事物の認識があることになる。

したがって真実が必要である。なぜならそのように事物があるように事物の認識と開示があるから。

第二

Secunda :

真理を取り除くことは、生を混乱させ壊滅させることである。ちょうどもし毒物が薬であると〔間違つて〕学ばれるなら、もし数字や、契約や判断の中に誤りが混ざっていれば、生は混乱させられてしまう。
したがって真実が必要である。

ここで私たちがしばしば教え込んできた忠告がとくに繰り返されなければならない。それゆえに神は人類に徳の認識を与えたのだが、それは自身がどのようなものであるかを教えるためであり、私たちの精神と意志とが自身と一致し調和するのを欲しているからであり、私たちに真実であることを命じている。それは極めて堅固に神自身が真実であると私たちが決心するためであり、その言葉が、あたかもエリスのりんごのように、あるいはスピックスのなぞのように人間を覆うように、欺瞞あるいは曖昧ではなく決心するためであり、神の脅しは、愚か者をどのようなふうであれ誘うための空の幽霊でも、発せられた約束でもないことを決心するためである。そうではなく神の声は、パウロが述べているように、不変のものである。しかし神は真実な方である〔ロマ 3, 4〕。

この見解は魂の中で強固にされ、その秩序によって神への畏怖、信仰、もしくは信頼、そして免罪への希望が生じてくる。ダビデは確かに姦通に対する罰を恐れ危惧していたが、しかし畏怖と信仰の段階が定められているのを知っていた。次のように、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました〔ロマ 5, 20〕。したがって彼は免罪を冀い、冀う者が受け入れられるのを、そして罰する者が和らげられるようになるのを知っていた。

ここで再び定められ断言されねばならない。神は真実であるので、神においては意志の矛盾は決してありえない。約束は普遍的であり、仲介者の下に救いを求めて来るすべての者が受け入れられることを断言している。したがって神の意志に関する限り、すべての者に免罪が外からもたらされるということであるが、しかしその中では他の意志が含まれていて、それは仲介者の下に救いを求めてくるある者を受け入れようとはしない、などと想像されてはならない。しかし極めて強固に定められ〔決心され〕なければならない。神は真実であるので、神の意志はそれのみであって、表された言葉の中に明らかにされていて、その中には矛盾した意志はないのである。

徳の近くには真実がある。真の見解の中には堅実〔一貫性〕があり、これは真理における不屈以外の何ものでもない。なぜなら不屈が状況において正しくないというのは、醜く致命的な強情であるからである。こう言われている。過つは人

の性なり。過りに留まり続けるのは悪魔的である。誠実も真実に近い徳である。ある程度は解釈の中で和らげられているが、不適切に、あるいは粗野に語られている。ちょうど寛容は正義に近い徳である、これは見られている者に対して(言われているように)最高の法あるいは厳格になる。しかし堅実と誠実はこうした証明によって理解され、これによって真理が教えられる。

このように正義に関連づけられるのは、慈善、親切、憐れみ、感謝、節度がある。なぜなら慈善、親切、憐れみは、正義と隣り合わせだから。というのも、たとえふさわしくない人物に与えるにしても、それでもやはり種としてふさわしい者に与えるのは、つまり、社会的共同体が、慈善、親切、そして憐れみなくして保持されえないからである。しかし神に負うものは彼らに与えるというのは、もっとはっきりと述べている。なぜなら神はこうした徳によって理解されるのを欲しているからで、これは善意により近くへ近づくもので、それは私たち自身が次のように書かれているようにあることを知るためである。憐れみは裁きに打ち勝つのです〔ヤコ 2, 13〕。つまり、法の厳格さに。同じく、赦しなさい、そうすれば、自分も赦される〔ルカ 6, 37〕。

そして憐れみの偉大さは主において明瞭な像によって記されている。主は奴隷を大きな負債から赦しました。そして後に赦さない奴隷を罰しました〔マタ 18, 23-35〕。これは主自身において憐れみが卓越していることを私たちが理解するためであり、また私たちも同じく憐れみを自分で訓練するのを主は欲しているのを理解するためである。とりわけ私たちの憐れみの奉仕において私たちの罪の認識と、神からの贈与があることを主は欲している。こうあるように。憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける〔マタ 5, 7〕。同じくニュッサのグレゴリウスもこう述べている。あなたが責めを感じるのなら、寛大に扱いなさい。なぜなら憐れみは神からの憐れみで報われるのだから。

残りの証明は明白であって、人間の間での感謝がどのようにあるかである。

人類が守られるためには、平等は必要である。

感謝を取り除くことで、平等もなくなる。

ゆえに感謝は必要である。

同じく

Item :

原因と結果が結び付くことは必要である。

恩恵を施す者は、神にせよ人間にせよ、他の者の救いの原因である。

ゆえに救う者はこの結び付きを認識していなければならない。

こうして神は人間の間に感謝を定めた。私たち自身もまた感謝のおかげであることを認識するために。

節度について

De Temperantia :

すべての自然は正しい秩序による自身の保持者である。

節度は生き物を守る。

ゆえに必要である。

勤勉もまた正義と関連しているが、これは職務において入念よりも優れた徳である。もっとも最低のものは怠惰とおせっかい(πολυπραγμοσύνη)である。パウロはこれについてテサロニケの信徒への手紙一4章で教えている〔一テサ4, 10f.〕。私たちが物事においてこれに秀でるように命じながら、熱心にこれに励むように、と。私たちが平穏な生活を愛するようになり、正しいことを行うようになるためである。さらにペトロは用心することを教えているが〔一ペト4, 15〕、それは私たちがおせっかいをしないようになるためであり、つまり、もの珍しくして私たちを他人の事柄に巻き込むことをしないようにするためである。

ここまで私は徳の区分について述べてきた。これらについては常にこの警告が視野になければならない。十戒より徳の種類と秩序は極めて正しく取り入れられているのである。次いでこの警告は必要である。ある徳は単純にすべての者にとって必要である。他のものは不必要である。神の法の中に規則がある徳は必要であるのを私たちは知っている。これは私たちに関係するものであり、反対の悪徳には神の怒りが告げられる、つまり威嚇があり、パウロがこれについてこう述べている。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです〔エフェ5, 6〕。

さて神の認識、恐れ、信仰、神への愛、信仰告白、親切な行い、祈り、果たすべき仕事への配慮、儀式の遵守、これら神が定めたもの、両親や子どもへの愛στοργή、当局への服従、隣人への正義、勤勉、真理、純潔、慎み深さ、節度、慈善、温和、寛容は必要である。アキレウスやそれに似たような者たちのような、これは英雄的な勇敢さは必要ではない^{*10}。これはたとえ大きな飾りであるにせよ、それでも神による特別の贈り物であり、私たちの努力によって獲得されるもので

*10 アリストテレス『ニコマコス倫理学(下)』高田三郎訳、岩波文庫、2009年、15頁以下、参照。

はない。こうした洗練された優雅さはすべての者にとってのものではない。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00112 の助成を受けたものです。

（ひしかり てるお・教授）